Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

アルフォンス・ミュシャ
《ゴーフレット・ラベル：ルフェーヴル=ユティル》
1899年　リトグラフ、紙

Contents

vol. 11

展示報告（2021年3月—2022年3月）
作品紹介
イベントレポート
ミュシャ館インフォメーション
主な作品修復報告
学芸員コラム

企画展

カランドリエ―ミュシャと12の月―

2021年3月27日（土）▶7月25日（日）

“カランドリエ”とはフランス語で暦（カレンダー）の意。ミュシャはパリ時代、ポスターをはじめとした商業美術の分野で活躍したことで知られていますが、一連のポスターや装飾パネルがあまりに有名なため、カレンダーというジャンルはポストカードやメニューとともに付随的に説明されがちです。そこで本展ではミュシャが手がけた多彩なカレンダー作品の魅力にあらためて注目しました。

またカレンダーにあわせて、季節や行事を描いた作品を紹介するほか、現代の私たちと同じく春夏秋冬の中で生きたミュシャの足跡を、彼の生涯における重要な日にスポットライトを当てながら、12の月の流れに沿って展覧しました。さらに、ミュシャが生きた時代の大阪・堺の暦と引札（広告チラシ）も紹介。暦にまつわる当時の東西文化をよりリアルなものとして体感して頂けたのではないでしょうか。

●Ⅰ ミュシャと12の月たち

第１章では装飾パネル《四季》シリーズをはじめ、月や季節の寓意（アレゴリー）的作品を中心に、季節の風習や行事をテーマとした作品を、めぐりゆく12の月の流れに沿って展覧しました。

1896年、パリでポスターデザイナーとして有名となっていたミュシャは、はじめて“装飾パネル”を制作します。記念すべきその最初のテーマは《四季》でした。春夏秋冬を女性の立ち姿で表したこのセットは広告目的を持たない文字無しのポスターで、室内鑑賞のために発売されたところ、大成功を収めます。このヒットを機に、季節や時間などの抽象的概念を擬人化し、女性として表現する趣向はミュシャ・スタイルのひとつとなりました。

ここでは展示室全体をまるでカレンダーのように12か月のセクションで構成。各月のセクションでは、ミュシャの78年間の生涯における重要な日についても注目し、その日を象徴する作品を、ミュシャの人物像がわかるエピソードとともに紹介しました。展示の詳しい内容は右ページ(➡p.3)をご覧ください。

●Ⅱ ミュシャのカランドリエ

第２章では、バリエーション豊かなミュシャのカレンダーとその習作、関連する装飾パネルをまとめて紹介しました。

ヨーロッパにおけるカレンダーには古い伝統があります。中世には、キリスト教信徒が1日8回の祈りを捧げるための祈祷文が書かれた時祷書（じとうしょ）に月日・星座と美麗な彩色細密画が描かれました。絵画の分野でも、ブリューゲルやプッサンなど、12か月や四季を描写した作品は枚挙に暇がありません。19世紀後半になると視覚文化が発達し、新聞や雑誌には絵が入り、かつて王侯貴族が祈りのために用いていたカレンダーも、一般の人々の手に届くものとなります。

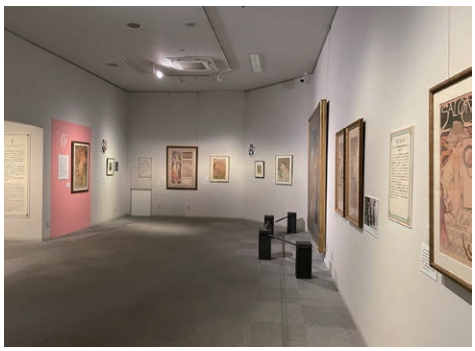
ミュシャはパリ時代、挿絵画家として生計を立てていた頃から、印刷会社などの企業の名前が入った宣伝用カレンダーの受注制作を始めます。初期のカレンダーは写実的な描写のクラシックな画風でしたが、装飾パネル《四季》シリーズの成功を境に、季節を人格化して描いたミュシャらしいカレンダーが制作されるようになります。また、《黄道十二宮》のようにカレンダー用として制作され人気を博した図が、暦部分を消した鑑賞用の装飾パネルとして転用される例も生まれます。

●Ⅲ ベル・エポックと明治期、東西のカランドリエ

３階展示室を第３章とし、ベル・エポックを代表するミュシャと同時代の画家として、スイス生まれの芸術家ウジェーヌ・グラッセ（1845-1917）が百貨店のために手がけたカレンダーと、ミュシャが活躍した時代のここ大阪・堺に焦点を当て、堺の商店が配布した「引札」と「引札暦」を展示し、東西の暦文化をお楽しみいただきました。

ミュシャが活躍した19世紀末から20世紀初頭のパリは、産業革命を経て都市文化が発達したベル（良き）・エポック（時代）と呼ばれる華やかな時代でした。パリの消費文化を象徴する存在であった百貨店は、当時最先端のアール・ヌーヴォー様式を取り入れたカレンダーやポストカードを販売促進用として発注します。

フランスにおけるベル・エポックは、日本では明治期後半から末頃にあたります。1888年に開通した阪堺鉄道が横切る町の中心部には、酒造業をはじめとした商工業者が集まっていました。明治末頃の商店では、顧客誘致や販売促進を目的に、一枚摺の極彩色の印刷物である「引札」を得意先に配布することが流行しました。当時の人々はこれを壁や襖に貼って楽しんだため、実用性の意味からカレンダーが挿入された「引札暦」も制作されたのです。



「春」コーナー展示室風景

《カレンダー1897年:ショコラ・マッソン/メキシカン》
左から1-3月／4-6月／7-9月／10-12月　リトグラフ、紙

《引札　醸造元　春駒印日本酒　特約大販売元鳥井合名会社（アサヒビール）》
制作年不明／堺市立中央図書館蔵

①

パリが一番美しい季節――それは春、復活祭（イースター）の季節だとミュシャは言いました。白やピンクの花が房をなして咲き、ダークブルーの空に映えてきらめく様子を、パリに降り立ったばかりのミュシャは「まるで天国を歩いているような感じ」と形容しました。アール・ヌーヴォーが頂点を極めた1900年のパリ万国博覧会が開幕したのも、また春のこと。ミュシャのパリにおける華々しい活躍は、春の花々によって彩られていたようです。

④

冬の女性たち――頭から全身に布を覆い、厳しい寒さから身を守るしとやかな姿をミュシャは描きました。しかし、単に冬の寒さを示しただけではありません。彼女の手の中では、震える小鳥に息吹が吹き込まれています。ミュシャの故郷チェコが長く辛い時代にあったことを思うと、“いつか春が来る”というミュシャの希望も重なって感じられます。また、別作品では冬の自然の静寂を、ミュシャは“眠る女性”としても表現しました。目を閉じた女性に精霊が口づけ、大地が芽吹く瞬間を、ミュシャは印象的に描いています。

4.14 1900

1900年パリ万国博覧会が開幕した日

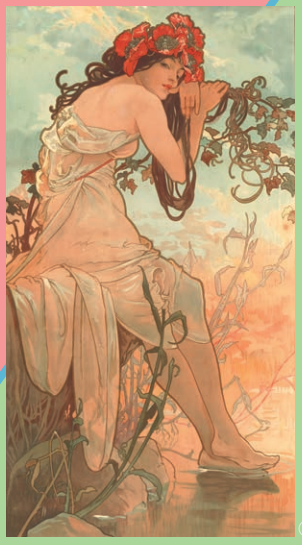
▶パリで既にデザイナーとして活躍していたミュシャは、これまでで最も大規模な万博のために、パビリオンの壁画やモニュメント構想、自身の作品の展示など、幅広く仕事を手掛けました。

春

冬

夏

秋



②

ミュシャは夏を描くとき、物憂げな少女をたびたび登場させます。そのけだるいポーズと表情は、強まる太陽の光や熱を帯びた大気を思い起こさせます。野生のケシで頭を飾り、水辺に足を下ろすこの情景は、ミュシャの故郷チェコ・南モラヴィアの夏そのものだといいます。チェコの夏に生まれ、そしてチェコの夏に息を引き取ったミュシャの原風景がそこにあります。チェコ人の女性マルシュカとプラハの教会で結婚式を挙げたのもまた清々しい初夏の日のことでした。

8.24 1893

ゴーギャンがタヒチからパリへ帰ってきた日

▶ミュシャは若い頃画家ゴーギャンと親交があり、2人はアトリエを共有したこともありました。

『白い象の伝説』
1894／書籍

ゴーギャンがモデルになった挿絵

12.9 1896

サラ・ベルナールを讃える日

▶ミュシャが一躍有名デザイナーになるきっかけとなった女優サラ・ベルナール。大女優である彼女を讃えるための盛大な記念式典でも、ミュシャはポスターやメニューをデザインしました。

《サラ・ベルナール》
1896
リトグラフ、紙

③

《1918-1928:独立10周年》
1928／リトグラフ、紙

10.28 1918

チェコスロヴァキア共和国が独立した日

▶1910年に故郷に戻ったミュシャは大作《スラヴ叙事詩》をはじめ、1918年に独立した新国家のために、紙幣や切手、国章などを無償でデザインしました。

秋――それはミュシャにとって悲しみの季節でした。一日中霧が漂い、木の葉も花も枯れ、寒さへ向かいゆく秋の到来を厭（いと）い、嘆き悲しむ手紙を残したほどです。幼い頃、10月の夜に目覚めた時の恐怖と涙を回想しています。そして、きらびやかだったパリ万博が去り、仕事に行詰まりを感じていた人生の過渡期を、秋という季節になぞらえるのでした。ミュシャがメランコリックに、そしてドラマティックにとらえていた秋。この季節にまつわる作品が、“異色”ともいえるものが多いのは、ミュシャの秋に対する特別な思いによるのかもしれません。

①《春:四季（1896年）》 ②《夏:四季（1896年）》 ③《秋:四季（1896年）》 ④《冬:四季（1896年）》 すべてリトグラフ、紙

企画展

ミュシャ芸術博覧会

2021年7月31日(土)▶11月14日(日)

ミュシャの才能は、19世紀末のパリにてデザイナーとして花開きました。植物や花々に取り囲まれたヴィーナスが微笑む「ミュシャ・スタイル」は、アール・ヌーヴォーの流行と呼応して当時のパリにセンセーションを巻き起こし、彼を代表するポスターや装飾パネルの数々が生み出されます。

こうしたミュシャの活躍の絶頂期に催されたのが1900年のパリ万国博覧会です。圧倒的な規模と華やかさを誇るこの博覧会は、装飾分野を含む芸術方面に重きが置かれました。ミュシャは自身の作品を出品するだけでなく、複数国のパビリオンの壁画や装飾を手掛けるなど、あらゆるデザインとアイデアをこの万博に捧げます。そして万博閉幕後ミュシャは、デザイン業の栄光にすがることなく芸術による祖国チェコへの貢献を志し、本格的な画家へと転身を図っていくのです。

本展“ミュシャ博”は1900年パリ万博の華やぎを回顧し、展示室を“グラン・パレ”と“プティ・パレ”、“未来館”のパビリオンに見立てながら芸術家・ミュシャのアートワークを通覧しました。絵画、版画、彫刻、書籍など様々な技法の作品を、ジャンルごとに公開。さらに現代の情報技術によるミュシャの映像コンテンツも体験いただきました。

●グラン・パレ－絵画への情熱―

1900年のパリ万国博覧会をイメージし“グラン・パレ――大きな宮殿”と名づけた第1展示室ではミュシャの画家としての姿に焦点を当て、画業初期の鉛筆デッサンや水彩画から、墨で描いた壁画の下絵、祖国チェコの少女を豊かな色彩で描いた油絵の数々を展覧。ミュシャの肉筆画を幅広くご紹介しました。

ミュシャは幼い頃から画家を志し、ウィーンやパリの美術学校で絵画の基礎を学びますが、在学中に突然、奨学金が打ち切られてしまいます。パリで自活せざるを得なくなったミュシャは、生計を立てるために書籍の挿絵などの仕事をこなしながら、その技量を高めることとなります。デザイナーとしての名声を手にしてもなお、ミュシャは絵画への情熱を忘れることはありませんでした。

画家ミュシャが自身の手で描いた線から感じられる息吹、また壁いっぱいの大型油彩画のダイナミズムを感じていただきました。

●プティ・パレ－デザインの仕事―

“プティ・パレ ――小さな宮殿”とした第２展示室では、ミュシャを有名にしたアール・ヌーヴォー様式の華やかなリトグラフ作品を中心に、ミュシャがデザインした作品をご紹介しました。

ミュシャのデザインの人気は、装飾パネルや絵はがきなどの日用品にまで広まります。ミュシャデザインの手引書として出版された『装飾資料集』には、デッサンから、植物の装飾モチーフ、女性像だけでなく、宝飾品や食器、家具のデザインまで描かれています。さらにプティ・パレでは挿絵画家として装丁から手掛けた児童書やミュシャ自身が万博に出品した彫刻や作品も併せて展覧しました。

誰にとっても芸術を身近にと考えていたミュシャ。グラン・パレで紹介した画家の姿とはまた異なる、デザイナーミュシャの才能と、平面作品だけにとどまらない、ミュシャ作品の魅力を知っていただけたのではないでしょうか。

●未来館
―1910～30sポスター―

1900年のパリ万博以降、20世紀の万博では、最先端技術を用いた演出がかかせないものになります。

未来館と名づけた３階展示室は、“1900年パリ万国博覧会から見た未来”の芸術と情報技術をお楽しみいただきました。

20世紀に一気にすすむ工業化・産業化の中で、新しい価値観と生活スタイルが生まれると、旅行やスポーツ、ファッションなどの娯楽が広まり、広告ポスターの需要はますます増えます。時代の変化は芸術の様式にも影響を与え、ポスターにもアール・ヌーヴォーとは対照的な幾何学的模様、直線や流線形のデザイン、明快な色彩などによって表現されたデザインが登場します。未来館前半では、その新しいデザイン表現を1910～1930年代のパリのポスター作品を通してご紹介しました。

●未来館―ミュシャ×映像メディア―

油絵やリトグラフ、彫刻など、様々な技法を使って自らの芸術を表現していたミュシャですが、さらに多種多様な表現方法が登場している現代において、ミュシャの作品と21世紀の情報技術が掛け合わさると、どのような表現になるのでしょうか。未来館後半では、関西大学総合情報学部AMDプロジェクトによる、最新の情報技術を駆使したデジタル展示でミュシャ作品を再構成。ミュシャのポスターや装飾パネル作品をモチーフに、動きのある光と影で再現されるミュシャ・プロジェクションアート。また、ミュシャが50歳から生涯をかけて描いた《スラヴ叙事詩》の見どころを映像でご紹介し、さらに、その《スラヴ叙事詩》を仮想美術館（VR）で体感いただくなど、21世紀の情報技術とミュシャ作品がコラボレーションした映像作品をお楽しみいただきました。

#ミュシャ博では、子どもたちに親しんでもらえるような展示空間を目指したの！

ムジカちゃん

作品の高さ

子どもたちの目線に合わせ、いつもより10cm低く作品を展示！ 一方で巨大な油彩作品《ハーモニー》は大きさを体感してもらうよう見上げるような位置に。

動物の足跡

壁の足跡をたどると、、ミュシャが描いた動物たちが!こんなところに動物がいたと、大人の方にも喜んでいただけました。

ふきだしパネル

ムジカちゃんやロレンゾ様、ミュシャの作品から飛び出したキャラクターがミュシャや作品について解説。

鑑賞ブック

展示室の絵を見ながらミュシャを味わう鑑賞ブック「むしゃむしゃミュシャ」を配布。ミュシャへのお手紙もたくさん届きました！

ミュシャのげいじゅつツアー

夏休み限定の子ども向け、親子向けの解説会。
展示室をめぐりながら、厳選したミュシャ作品をじっくり鑑賞！

初めてのミュシャ、初めてのミュシャ館を楽しんでくれたかな？

ロレンゾさま

企画展

ミュシャ・スタイルの秘密

2021年11月20日(土)▶2022年4月3日(日)

「私のやり方でやったのだよ。」――アール・ヌーヴォーや時代の流行として自らの芸術が語られそうになった時、ミュシャはいつもこのように言い直したと言われます。

1900年にはすでに“ミュシャ・スタイル”と呼ばれたミュシャ独自のデザイン様式は演劇《ジスモンダ》のポスターから始まりました。そして今、SNS上には、“ミュシャ風”と題した作品や、“ミュシャっぽい”と評する言葉が多く投稿されています。円環をいただく神秘的な人物、植物や有機的な曲線の装飾文様……1860年生まれの画家が生み出した表現手法は時を越えてなお、ミュシャという個性を強く印象づけ、人々をときめかせているのです。

本展ではミュシャ・スタイルがどのように作られたのか、ポスター作品に散りばめられたミュシャのアイデアを見つけながら、ミュシャが残した言葉も手がかりに、“ミュシャ・スタイル”の世界を探りました。

●ポスター革命

ミュシャがポスター界にデビューする前にパリを彩った巨匠たちのポスター作品と、ミュシャが最初に制作したサラ・ベルナール主演の演劇ポスター《ジスモンダ》伝説を中心に、ミュシャ・スタイルの始まりをご紹介。

1869年、リトグラフ職人でもあったジュール・シェレによってはじめて4色刷のポスターがパリの街に貼り出されます。人の目を惹きつけ、情報を文字だけでなく視覚的な美しさで伝えるシェレのポスターは、広告という目的を超え、ポスターに芸術性を与えます。

瞬く間にポスターというメディアが持つ魅力と可能性が人々に広まりました。パリの街角はギャラリーになり、誰もが目にできる芸術としてポスターが親しまれるようになります。

当時挿絵画家として生計を立てていたミュシャは、この時流の中、運命を変えるポスター《ジスモンダ》の依頼を引き受けます。1895年1月1日にポスターが貼りだされるや否や、パリっ子たちを魅了しました。主演女優サラ・ベルナール扮するジスモンダの全身描写と円形モチーフ。構図、色、モチーフとその後のミュシャの作品に共通する独自の特徴が、《ジスモンダ》で確立されています。

●ミュシャ・スタイルの秘密

《ジスモンダ》の成功で一躍ポスター作家として有名になったミュシャは、リトグラフ工房シャンプノワ社のお抱えデザイナーとしてさまざまなポスターを制作します。演劇、酒、たばこ、香水、鉄道旅行、自転車など当時の流行がミュシャ・スタイルによってパリ中に宣伝されました。商品の世界へ誘うように、女性像を起点にした視覚誘導や目に与える曲線の効果などミュシャはポスターと商品を印象づける工夫を試みています。また、人物像、植物や曲線からなる文様や装飾などの個々のモチーフには、ミュシャが学んできた技法とミュシャ自身の芸術論に裏付けられた表現方法が見られます。そんなミュシャ・スタイルの手法やモチーフを「下絵」「女性とイメージ」「植物」「装飾モチーフ」をキーワードにご紹介しました。

ミュシャの下絵

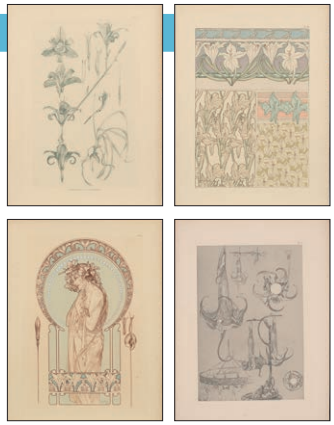
ミュシャはモデルと写真を使ってミュシャ・スタイルの大きな魅力であるしなやかな人物を描いています。バランスのとれたプロポーション、服の下まで意識した立体的で正確な身体表現には、幼少期から鍛えられた観察力と画塾で学んだデッサン力が活かされています。

左《トラピスティーヌ〈下絵〉》1897／鉛筆、コンテ、紙
右《トラピスティーヌ》／1897／リトグラフ、紙

ミュシャと植物

ミュシャが描く植物は、同じ画面上でも、写実的であったり、デザイン化され図案的であったりと、その表現を巧みに使い分けています。さらに作中の植物の多くは、暗喩的に描かれています。

精緻なスケッチから、図案化されていくようなミュシャのデザイン思考に触れながら、改めて描かれた植物の意図にも注目してみてください。



『装飾資料集』／1902　上段　左 図25　右 図36　下段　左 図9　右 図70

ミュシャの女性と商品イメージ

ミュシャ・スタイルにかかせない魅惑的な女性たち。彼女たちは、商品がもつ世界観へ誘い込み、手元の商品へと導きます。ミュシャは大きな商品名と強い色で目をひくのではなく、彼女たちの視線に、髪の流れに、指先にしたがって画面全体へ誘導させます。ポスターに釘付けにして、商品を印象づけるという手法をとっています。

《ランスの香水「ロド」》／1896／リトグラフ、紙

ミュシャと装飾モチーフ

ひっきりなしに仕事依頼がやってくるほど売れっ子デザイナーだったミュシャは、全ての依頼には応えられないかわりに、またデザインを学ぶ学生に向け、ミュシャ・スタイルの素材集を販売し、自らのデザインを解放していたのです。

『鏡によって無限に変化する装飾モチーフ』
1905／カラーステンシル／OGATAコレクション蔵

祝祭の装飾から、チェコ人、スラヴ人、そしてクリスチャンとしてのミュシャのルーツを探るテーマ展示。

「ミュシャ･スタイルの秘密」に合わせて3階展示室では、テーマ展示「ミュシャが描いたクリスマス」と「ミュシャとスラヴの民族文様」を前期後期で開催。クリスチャンだったミュシャは子ども時代に聖歌隊にも所属し、多感な10代前半の多くを教会で過ごしました。祝祭の風景や音楽、ステンドグラス、建築、フレスコ画と、教会での時間はミュシャの感性に大きな影響を与えています。

クリスマス、復活祭、民族衣装にちなんだミュシャの作品に合わせて、日本玩具博物館のコレクションからチェコやフランスのオーナメント、スラヴ諸国のイースターエッグ資料をご紹介しました。

《モラヴィアのクリスマス》／1891
紙に印刷／ OGATAコレクション蔵

ミュシャが描いたクリスマス

2021年11月20日～2022年1月30日

1891年に書籍の挿絵として描かれたとされる《モラヴィアのクリスマス》。この作品には、クリスマスの彩りが散りばめられています。中央の男性が広げるのはチェコでベトレムといわれるキリスト降誕の場面を再現したもの。部屋の中にはモミの木やリース、麦穂やトウモロコシ、クルミやブドウなどの収穫物が細かく描きこまれています。

古代の冬至祭や収穫祭と結びついたヨーロッパのクリスマス飾りには、麦わらやくるみなど自然素材でできた飾りは一般的です。

チェコやフランス各地の伝統工芸とも結びついたクリスマス飾りもお楽しみいただきました。

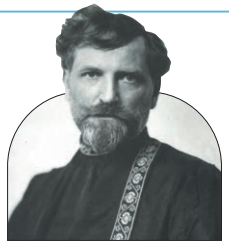
チェコの伝統工芸チェコガラス、チェコビーズのオーナメントと《四季》シリーズ

書籍『クリスマスと復活祭の鐘』とフランスのキリスト降誕人形

ミュシャとスラヴの民族文様

スラヴ諸国のイースターエッグとともに

2022年2月3日～4月3日

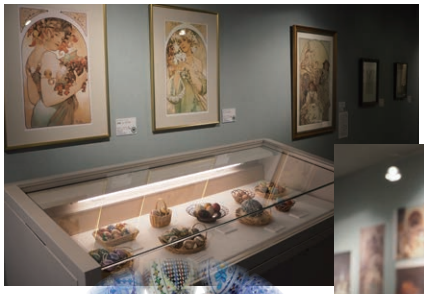


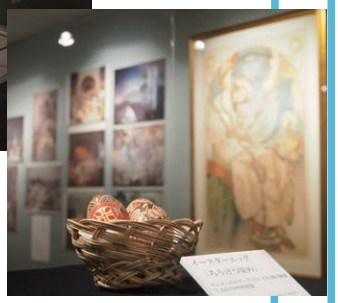
民族衣装「ルバシカ」を着たミュシャ

百合の中の聖母（最後の習作）
1904／油彩

子どものころから民族衣装に心を奪われていたミュシャ。パリに出るとチェコの民族衣装をコレクションし、自らも民族衣装を着て過ごしていました。《スラヴ叙事詩》 制作を決意した1900年以降、ミュシャの作品にはチェコやスラヴの民族衣装を着た子どもたちが多く描かれるようになります。

イエス・キリストの復活を祝う復活祭（=イースター）。西洋では自然界の目覚めにも通ずる春の代名詞ともなっています。その復活祭を彩るのがイースターエッグです。チェコをはじめ、スラヴの国々ではキリスト教が広まる以前の太陽信仰の時代から鳥を神の使者として捉え、その鳥の卵に、様々な願いを込めて装飾されてきました。





刺繍や、図案化された装飾文様を身近に目にしていたことは、ミュシャの装飾性にも影響を与えていたのかもしれません。ミュシャの感性を育んだチェコの文様、そしてスラヴ民族としてのアイデンティティを強く自覚していたミュシャの思いも作品とともにご紹介しました。

堺市ではミュシャの作品を中心に約500点の作品を所蔵しています。企画展で展示された作品や人気作品などをピックアップしてご紹介します。

《カレンダー 1898年:ショコラ・マッソン／メキシカン》

1898年　リトグラフ、紙　295×215mm
●企画展「カランドリエーミュシャと12の月ー」に出品

1898年7-9月

“ショコラ・マッソン”――それはパリのリヴォリ通り、ルーヴル美術館の向かいにかつてあったチョコレート専門店。1850年代以降、各国で開かれた万博に出品し、受賞を重ねた人気店だったようだ。1890年代には“ショコラ・メキシカン”の名が店名と同等の扱いで用いられるようになる。“メキシカン”が商品名かキャッチフレーズかは定かではないが、同店の主力商品である滋養強壮剤としてのチョコレートドリンクを表していたことはほぼ間違いない。

同店のプロモーションに携わったミュシャは、装飾パネル《四季》の図柄を転用した1897年の4点組カレンダーをノベルティアイテムとして制作した。きっと好評だったのだろう、翌年1898年には同形態のカレンダーを、今度は同店のための描き下ろしとみられる絵柄で制作する。それが本作、“人生の四季”と呼ばれるカレンダーだ。

ミュシャには珍しく、主役は男性。春夏秋冬を、幼年期・青年期・壮年期・老年期のライフステージになぞらえ、うつろう情景とともに描いている。寄り添う女性は、彼らの目には見えない精霊のような存在であろうか。華麗な装飾はさることながら、目を引くのは秋――壮年期の男性であろう。なぜ、石斧を手にした褐色の肌の男性が意表をつくように登場するのだろうか。

国立民族学博物館名誉教授の中牧弘允氏によると、この男性にはメキシコ北部のララムリの特徴が見られるが、その髪型などからはむしろ北米の先住民族アパッチの特徴が濃厚だという。メキシコはカカオの原産地で、古代から飲用していたチョコレート発祥の地でもある。“ショコラ・メキシカン”はこうした背景に基づくネーミングであろうし、ミュシャもまたメキシコへのイメージを、広くアメリカ大陸の先住民族に求めたと考えられる。なお、アパッチ族の戦士として有名なジェロニモは1904年のセントルイス万博で注目され、またミュシャは同万博のためのポスターに先住民の男性像を描いていることも見逃せない。

1893年1-3月

1898年4-6月

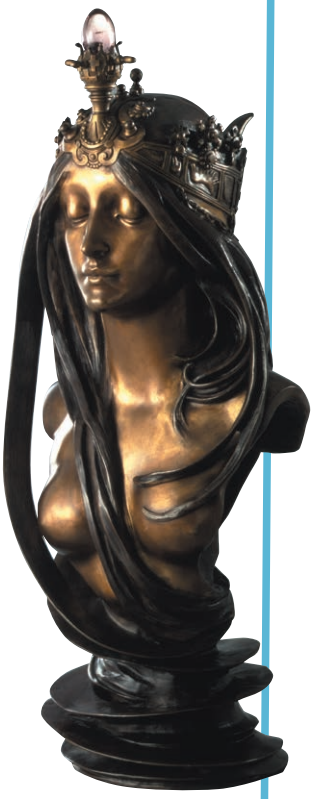
1898年10-12月

一方、四隅に円環状に描かれた鳥の文様は、ジャポニスムの影響もあり19世紀末の流行モチーフであった孔雀のようにも見える。孔雀がヨーロッパでは不死のシンボルとされていたことを考えると、古代マヤの時代から「不老長寿」の薬であったチョコレートにふさわしいモチーフとして、また人の生の営みへの願いとして、ミュシャが描き添えたと解釈できるかもしれない。

1898年というのは、2022年と日付と曜日が一致する。当時に思いを馳せながら眺めてほしい。（M.T.）

《ラ・ナチュール》

1899-1900年　ブロンズ、アメジスト　683×257×288mm
●企画展「カランドリエーミュシャと12の月ー」と「ミュシャ芸術博覧会」に出品、神戸ファッション美術館へ貸出



頭上に冠を頂き、目を閉じているようにも伏せているようにも見える女性の胸像。アール・ヌーヴォーらしい流れるような曲線を描いた髪が肩から胸へとおりている。「ラ・ナチュール（自然）」というタイトルが示すように、自然そのものを擬人化した作品なのだろうか。

パリのカルナヴァレ美術館が所蔵しているミュシャの下絵を見ると、本作は1901年に完成した宝石商ジョルジュ・フーケの新店舗の暖炉の上に飾る装飾品としても構想されていたようだ。しかし詳しい理由は不明であるが、結果的には店の内装として使用されることはなく、1900年のパリ万国博覧会のオーストリア館で展示された。現在、冠の頂きにはアメジストがはめ込まれているが、一説によればかつては当時の最新技術であった電球がはめ込まれたという。

《ラ・ナチュール》は本作を含め全世界に5点のバージョンが存在している。当館が所蔵する像はブロンズ製だが、銀色バージョンも存在するようだ。またそれぞれの冠の宝石は異なり、耳穴にイヤリングが付いている像もある。本作は1896年のリトグラフ作品**《黄道十二宮》**を立体化したものとも言われ、両作品の冠の形や装飾は非常によく似ている。モデルとなった人物としては、ミュシャがデザイナーとして飛躍するきっかけをもたらした女優サラ・ベルナールや当時のダンサーの名前も挙がっている。またミュシャは本作を作るにあたってルーヴル美術館に所蔵されている15世紀のイタリアの彫刻家の作品を源泉にしたともいわれている。このように諸説あり、注目の的ではあるが謎も多い本作は、世紀末から現代に至るまで微笑むような静かな表情で時代を見守っているようである。（Y.K.）

《黄道十二宮》／1896
リトグラフ、紙／堺 アルフォンス・ミュシャ館蔵

《ロレンザッチオ》

1896年　リトグラフ、紙　2072×764mm
●企画展「ミュシャ芸術博覧会」に出品

初制作のポスター《ジスモンダ》を契機に、サラ・ベルナールと契約したミュシャ。その後サラのために6点の演劇ポスターを制作する。《ロレンザッチオ》は、それらのうちの3作目のポスターである。『ロレンザッチオ』は、16世紀のフィレンツェで実際に起きたメディチ家の暗殺事件を元にした、アルフレッド・ミュッセの戯曲である。フィレンツェを支配していた暴君のアレッサンドロ・デ・メディチのいとこであり、悪友でもあるロレンザッチオは、アレッサンドロの腹心を装いながら暗殺を企て実行。しかしその後もメディチ家の支配は続き、ロレンザッチオは報復に怯えながら暮らすも、新たにフィレンツェ公となったコジモ・デ・メディチによって最後は惨殺されてしまう……。この悲劇の物語をミュシャはどのようにポスターで伝えたのだろうか。

背景は、フィレンツェ特産の絹織物を連想させる植物文様の中に、6つの赤丸のメディチ家の紋章が描かれている。そこにのしかかるように威嚇するドラゴンからは、フィレンツェを圧政するアレッサンドロの暴君ぶりが見て取れる。サラ・ベルナール扮する主役のロレンザッチオは、大きなS字を描いてたたずんでいる。陰のある目で遠くを見つめ、口元に手を当てた表情の彼は、暗殺について、アレッサンドロとの複雑な関係について、はたまた暗殺後も変わらぬ支配について、思いをめぐらしているのだろうか。腰元の短剣と足元に見える剣で突き刺された人物から、二人の行く末が暗示されている。

当時の演劇ポスターは、芝居の劇的な一場面が描かれることも多かったが、ミュシャは劇中でキーワードになるモチーフを象徴的に描き、観る者を物語の筋へ誘導している。

実は主役のロレンザッチオは、肉体的にも精神的にも中性的な人物像として書かれていたため、当時のフランス社会では、男性俳優が演じる難しさから上演不可能ともされていた。それをサラ・ベルナールが男装で演じたことで、大成功を収め、その後も、7作目のポスターとして、ミュシャが手がけたハムレット役へとつながることとなる。（Y.H.）

YouTube「ミュシャ館チャンネル」

2020年より開始したYouTube「ミュシャ館チャンネル」は、コロナ禍でもおうちでミュシャを楽しめるコンテンツ。学芸員が企画展の見どころを解説する動画や展示のイメージムービー、関西の主要駅で公開しているミュシャのデジタルサイネージ広告動画も配信中です。外出が難しい期間もミュシャファンのみなさまに、おうちでミュシャを楽しんで頂ける機会となりました。今後も展覧会や作品を紹介する動画を配信予定です。まだの方はぜひチャンネル登録をお待ちしております！

ミュシャ館公式SNS更新中

ミュシャ館公式Facebook・ツイッターではイベントやメディア情報など館の最新情報を更新中です。また公式インスタグラムでは、ミュシャの細部にいたる描画や装飾性をご覧いただけるように、作品の一部をクローズアップしてご紹介するなど、ミュシャ作品の魅力を発信しています。是非チェックしてみてください。

御池台小学校 出張授業

御池台小学校でミュシャのレプリカを使った鑑賞の授業を行いました。まず何も知らない状態で生徒たちがミュシャの作品を見て、それから皆で作品を見ながら感じたことや考えたことを話し合いました。そして最後に学芸員が作品やミュシャについてお話しました。コロナ禍で生徒同士の会話も難しい中、久しぶりに活気のある授業になりました。

神戸ファッション美術館への作品貸出

2021年11月20日から2022年1月16日まで神戸ファッション美術館で開催された特別展「アール・ヌーヴォーの華 アルフォンス・ミュシャ展」に、当館から所蔵作品《ラ・ナチュール》、《夢想》、そして《四芸術》シリーズの4点「ダンス」、「絵画」、「音楽」、「詩」を貸出しました。期間中は多くの来館者の方にお越し頂き、当館の目玉作品の1つでもある彫刻《ラ・ナチュール》とともに、ミュシャの世界に浸って頂きました。

クラウドファンディングプロジェクト「ミュシャ×堺緞通」成立 《クオ・ヴァディス》絨毯化の夢、実現へ！

ミュシャの絵画を堺の手織り技で絨毯に。110年前の夢を実現したい。

堺 アルフォンス・ミュシャ館

《クオ・ヴァディス》／1904／油彩、カンヴァス

寄付総額
5,221,000円　目標金額 1,500,000円

寄付者 392人　募集終了日 2021年12月24日

プロジェクトは成立しました！　♡ 35

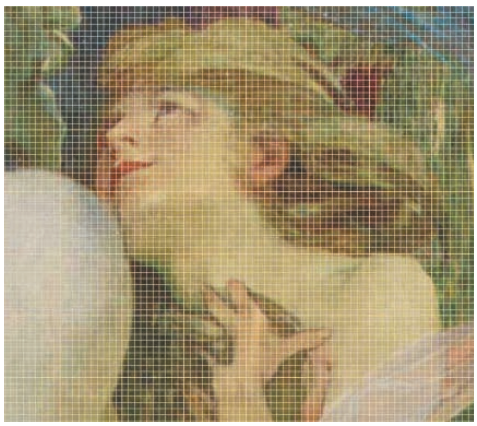
シェア　ツイート　LINEで送る　noteで書く

※READYFOR プロジェクトページより

縦横2メートルを超える大型油彩画《クオ・ヴァディス》は、パリで描かれ、画家と共にアメリカに渡った当館の主要コレクションのひとつです。本作は1910年頃のシカゴにて絨毯の絵柄となる計画があったものの実現せず、約40年前に発見されるまで長らく行方不明でした。一方、作品を所蔵する堺には伝統的な絨毯の手織り技術「堺緞通」が今もなお受け継がれています。このプロジェクトはミュシャの《クオ・ヴァディス》と「堺緞通」の技をコラボレーションさせ、絨毯化構想を110年の時を超えて実現させようというものです。

今回、かつてない「堺緞通」の製作や展示・公開、その過程を記録する動画や図録の制作、絵画の光学調査などにかかる費用を、クラウドファンディングサイト「READYFOR」で募りました。2021年10月27日に開始したところ、わずか4日で第一目標金額150万円に到達。その後も連日多くのご寄付をいただき、12月24日の募集終了までに392名もの方々から総額5221,000円のご支援を頂戴いたしました。

2022年1月初旬からはついに堺緞通の製織が始まりました。製作するのは当館からほど近い大阪刑務所。受刑者の職業訓練のなかで約1年～1年半で完成する予定です。完成品は2023年12月から開催予定の特別展「クオ・ヴァディスの謎（仮）」で公開する予定です。



使用予定の図面（拡大図）

大阪刑務所織機

主な作品修復報告（2021年度）

作品名	制作年	技法・材質	寸法（タテ×ヨコmm）	処置内容	委託先
《百合の中の聖母》の習作	1903年	パステル、紙	1250×1100	画面の洗浄、作品縁に接着された異物の除去、額の新調と額装方法の改善	山領絵画修復工房
スラヴの民族衣装を着た少女《スラヴ賛歌》の習作	1911年	油彩、カンヴァス	603×419	剥離部の接着・安定化、表面の汚れの除去、欠損部の充填・補彩、額装改善など	森絵画保存修復工房
『主の祈り』(チェコ語版)	1899年	書籍	406×304×15	クリーニング、破れ補填、しわ伸ばし、綴じの改良など	書物の歴史と保存修復に関する研究会

当館では、ワークショップや講演会など、企画展に関連したイベントを開催しています。2021年度はこんなイベントを開催しました。

講演会 “アートとカレンダー―ミュシャと12の月展に寄せて”

2021年4月10日(土) 14:00～15:30
講師/中牧弘允氏（国立民族学博物館名誉教授、吹田市立博物館特別館長）

企画展「カランドリエ ミュシャと12の月」に関連して、世界のカレンダー研究家、中牧弘允氏にミュシャとカレンダーをテーマにご講演を頂きました。《黄道十二宮》や《四季》をはじめ、ミュシャの多くの作品がカレンダーデザインとしても使用されました。講演では、西欧のカレンダーの歴史の中にミュシャのカレンダー作品を位置づけ、また堺とつながりのある日本のカレンダーのお話もして頂きました。参加者のみなさまにはミュシャと古今東西のカレンダーのお話を存分にお楽しみ頂きました。

展示室がパリの街角に!? “手回しオルガンがやってくる♪”

2021年7月31日(土) 13:00～/15:00～
出演/手回しオルガン奏者　ワオちゃん

企画展「ミュシャ芸術博覧会」を記念し、展覧会初日にオープニングセレモニーを行いました。1900年パリ万博に見立てた展示室で、手回しオルガンをワオちゃんが演奏し、会場はたちまちパリの街角のような雰囲気に包まれました。他にも学芸員によるオープニングトーク、そしてバルーンプレゼントなどもありました。お子様を中心に多くの参加者にお越し頂き、「ミュシャ芸術博覧会」を盛り上げました。

映画上映 “ディリリとパリの時間旅行”

2021年8月7日(土) /8月22日(日) 14:00～

ミュシャが活躍した19世紀末のパリを舞台にした映画『ディリリとパリの時間旅行』の上映会を行いました。主人公の少女ディリリが青年オレルとともに誘拐事件の謎を解くお話でした。映画ではピカソやロートレック、そして女優サラ・ベルナールが活躍し、街角にはなんとミュシャのポスターも登場しました。上映前には学芸員による作品解説もあり、参加者のみなさまには、ミュシャとベル・エポックのパリの雰囲気を満喫して頂きました。

© 2018 NORD-OUEST FILMS – STUDIO O – ARTE FRANCE CINEMA – MARS FILMS – WILD BUNCH – MAC GUFF LIGNE – ARTEMIS PRODUCTIONS – SENATOR FILM PRODUKTION

“学芸員による作品解説ツアー”

企画展やテーマ展示の見どころを学芸員が解説する「学芸員による作品解説ツアー」を企画展毎に実施しました。コロナウイルスの影響により、当初開催を予定していたものの、残念ながら開催できなかった回もありましたが、収束期間の合間をぬって小規模に開催しました。来館された方は長時間にも関わらず熱心に解説を聞き、解説の後もご質問を頂くなど、興味を持って鑑賞されていました。

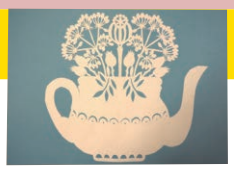
＊企画展「ミュシャの芸術博覧会」では、8月の毎週金曜日に、特別に子ども向けギャラリートーク（➡p.5）も開催しました。

ワークショップ “ミュシャのデザインカード作り”

2021年12月18日 10:00～16:00
2022年 1 月 8 日 11:00～16:00
2022年 2 月23日 11:00～16:00

ミュシャの作品からモチーフを切り出して、オリジナルのミュシャカードを手作りしました。細かいミュシャのモチーフを切り抜くのは難しかったのですが、参加者された方々は夢中になって取り組み、個性が光るカードがたくさん出来上がりました。皆さま作ったカードを誰かに送るのか、はたまた自分の家に飾るのか、わくわくしながら持って帰られました。

ワークショップ “チェコの切り絵づくり” 2022年3月21日(月・祝)　11:00～15:30



クリスマスやイースターなどでも飾られ、チェコの家庭やお店などで親しまれている切り絵キットを使ってワークショップを行いました。図案の半分が描かれた紙を半分に折り、はさみとカッターで2枚一緒に図案を切り出し広げると、左右対称の植物や人物の切り紙細工が出来上がります。

普段使い慣れていないカッターと細かい図案に苦戦されてる方も多かったですが、完成して紙を広げた瞬間、みなさん喜びの声をあげていました。切り絵細工の装飾というミュシャの故郷チェコの文化にも触れていただけたのではないでしょうか。

学芸員コラム vol.6

ジスモンダの魅力

なぜミュシャのポスターはセンセーションを巻き起こしたのか

《ジスモンダ》1895年
リトグラフ、紙　2177×749mm

1895年1月1日にパリの街中に貼りだされた演劇『ジスモンダ』のポスターは、人々にセンセーションを巻き起こし、ポスターデザイナーとしては無名だったミュシャが一躍街にその名を知らしめた…。このエピソードはミュシャのデザイナーとしての衝撃的なデビューが語られる時の定番である。ポスターがパリの街に貼り出された当時のことをふり返って、雑誌『ラ・プリュム』のある執筆者は、《ジスモンダ》の登場が「センセーションを起こした」と書き、また本誌の編集長レオン・デュシャンは本作によって、芸術家、そして芸術コレクターの世界が「激しく湧き立った」として、ミュシャの鮮烈なデビューを記した。では具体的に《ジスモンダ》の何がセンセーションだったのだろうか。今回はこの《ジスモンダ》がなぜ19世紀末のパリで評判になったのか、その魅力を当時の人々の反応や他の画家の作品と比べながら改めて探ってみたい。

《ジスモンダ》は女優サラ・ベルナールが中世の公妃ジスモンダを演じる芝居の告知ポスターである。約2メートルの縦長の画面にサラが演じるジスモンダがシュロの枝を持って立つ姿がほぼ等身大で描かれている。当時書かれた記事では、このミュシャのポスターの色彩がたびたび賞讃されている。それまで白黒の文字中心であったポスターは、19世紀後半に多色刷り印刷技術が発達、ポスターという新しい表現方法に多くの画家たちが挑戦するようになった。印刷工兼デザイナーであったジュール・シェレは「シェレット」（図1）と呼ばれるパリジェンヌをモチーフにしたポスターが有名で、生涯1,400枚以上にもわたるポスターを制作した。リトグラフ先進国であったイギリスで学んだシェレは、パリに自らの工房を構えてポスターに赤や黄色を使った華やかな彩りを与えた。一方、ミュシャは当時の記事が彼の作品を「控えめでとても繊細な色彩」と評したように、淡い色合いでまとめることが多かった。シェレと比べて自立つ色合いではなかったが、当時の批評家たちは「好ましく調和のとれた色彩」、「色彩に節度ある優雅さ」をその魅力として挙げ、ミュシャのポスターを称賛した。

一方で《ジスモンダ》は「空っぽで貧弱」であるという評価もあった。ミュシャよりも早くポスター画家として活躍していたウジェーヌ・グラッセによる《ジャンヌ・ダルク》（図2）は、《ジスモンダ》と同じくサラを描いた演劇ポスターである。グラッセはミュシャにも影響を与えたとも言われており、主役を演じるサラの全身像を中心に、上下に演劇タイトルなどの文字が配されている点は共通している。一方《ジスモンダ》は背景の下半分には余白があるし、《ジャンヌ・ダルク》のような力強い線描には欠けている。しかし《ジスモンダ》の衣装とその装飾や彼女の背後を飾るモザイク模様は細部まで繊細に描きこまれ、高貴な身分のジスモンダにふさわしい豪華な雰囲気と威厳を表している。実際に注文主であるサラ自身もミュシャの作品の「繊細なデッサン」などの特徴が彼女の親しいパリの人々を魅了するだろうと言ってミュシャに称賛の言葉を送った。

ミュシャのポスターは当時「繊細で魅力的な独創性」があるとも言われたが、それは控えめな色彩や細部まで描きこまれた繊細な装飾による独自性が要因だったのではないだろうか。これらの特徴はミュシャ独自のデザイン・スタイルとして確立し、以後サラのために描く6つの演劇ポスターをはじめ、後のリトグラフ作品へと引き継がれていった。

19世紀後半は、ミュシャたちのような芸術家たちがこぞってポスターを描き、ポスターはパリの「自然の植生」と形容されたように至る所に貼られ、街は「イメージの美術館」と言われた。日本でもよく知られているロートレックなど多くの画家たちが多様なポスターを手掛けたポスター戦国時代の中では、個性のあるポスターでなければ通り過ぎる人々の注意を引くことはできなかっただろう。このような状況の中、《ジスモンダ》の淡い色彩や繊細な装飾といった独創性はパリの街にセンセーションを巻き起こす一因となったのではないだろうか。（Y.K.）

図1

図2

図1　ジュール・シェレ
《グレヴァン博物館「光のパントマイム」》
1892年

図2　ウジューヌ＝サミュエル・グラッセ
《演劇「ジャンヌ・ダルク」》
1889／90年　1160×700㎜
京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵
（AN_2670）

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

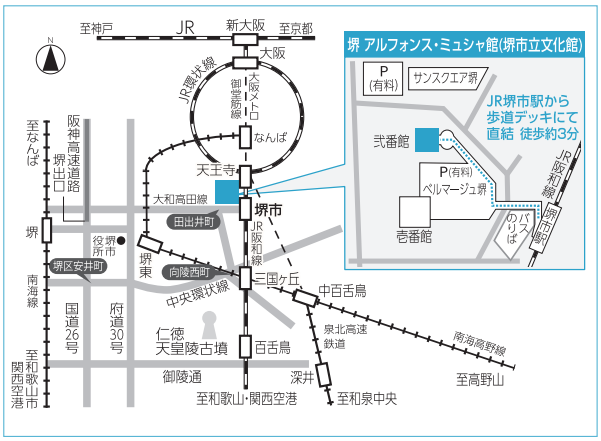
観覧料　詳しくは公式ウェブサイトをご参照下さい

開館時間　9時30分―17時15分（入館は16時30分まで）

休館日　月曜日（休日の場合は開館）、
休日の翌日（翌日が土・日・休日の場合は開館）、年末年始、展示替期間

交通　JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分
JR快速にて ・大阪から約25分 ・天王寺から約10分・
和歌山から約60分 ・関西国際空港から約40分

590-0014 堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL:072-222-5533　FAX:072-222-6833
https://mucha.sakai-bunshin.com　公式ウェブサイト



発行日＝2022年3月31日　発行＝堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）　執筆＝川口裕加子(Y.K.)、原田悠里(Y.H.)、髙原茉莉奈(M.T.)　印刷＝株式会社松岡印刷所